

氏名・（国籍）	王 雪（中国）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博甲第32号
学位授与年月日	令和7年3月12日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	『集古今仏道論衡』の研究
論文審査委員	主 査 教授 落合 俊典 副 査 教授 池 麗梅 副 査 教授 デレアヌ フロリン

論文内容の要旨

本論文は『集古今仏道論衡』に対して文献、歴史、思想などの方面から総合的な研究に取り組んだものである。道宣（596～667年）撰『集古今仏道論衡』（略称『仏道論衡』）は、後漢から唐初に至るまで、仏教と道教との間に繰り広げられた論争に関わる記事を集めた全四巻の護法書である。『集古今仏道論衡実録』、『古今仏道論衡』、『仏道論衡』とも呼ばれる。道宣が同書を撰述するに当たって、『晋書』、『弘明集』、『高僧伝』等の史料を参考にしたほか、自らの著述である『続高僧伝』などからも一部の記事を抜き取って再利用している。仏教の立場から護法思想を全面的に打ち出し、神秘的な記述内容も多数含まれているが、仏道論争の重要事案を網羅し、特に南北朝時代から唐初に至るまでの儒仏道三教の交渉史を研究する上で、極めて重要な文献資料の一つである。

『仏道論衡』の資料は価値が広く認められ、様々な研究に活用されてきたが、『仏道論衡』そのものに関する研究はまだ少ない。まずテキスト自身に成立及び流伝についての議論がある。宋元時代の刊本大蔵経は、形式的特徴と目録構成という二つの基準に基づいて、「中原開宝蔵系」・「北方系」・「江南大蔵経系」という三つの系統に分類されている。この三系統の間で、『仏道論衡』のテキストは互いに一致していない。現在、最も広く使われている『仏道論衡』のテキストは、『大正蔵』第五十二巻に収録された高麗再雕本を底本とし、「宮」（開元寺蔵本）・「宋」（思溪蔵本）・「元」（普寧蔵本）・「明」（嘉興蔵本）の四本で対校したものである。実際には最初の開宝蔵本の巻三と巻四に重大な欠陥があり、再雕本の底本である高麗初雕版は、最も長安写経に近い契丹蔵本に基づく校合によって、ようやく道宣が撰述した四巻本の様相を呈するに至った。第一章では三大刊本系統大蔵経の成立過程を踏まえながら、三大刊本大蔵経本の『仏道論衡』を中心に概観した。

経録の記載に基づくと、『仏道論衡』のテキストとして、かつては三巻本と四巻本の二種が

あったことが分かる。中国・高麗の刊本大藏經に所収されている『仏道論衡』のテキストはすべて四巻本であるが、日本古写經本にだけ三巻本が残っている。その日本古写經の三巻本と刊本系統の四巻本とを比較した結果、両者の間には内容の差が確認された。第二章では興聖寺本・七寺本・金剛寺本を中心に『仏道論衡』の日本古写經本を概観した。それぞれが属する一切經と寺院の成立過程を踏まえながら、諸本の書誌情報を示した。そして日本古写經本の伝来を遡り、原初の完全な三巻の古写經本は円珍請来のもの、と確認した。

第三章では、まず經録を利用して、刊本系統テキストと写本テキストとの違いを互いに検証し、『仏道論衡』の初治本（三巻）から再治本（四巻）への成立過程を確認した。収録された記事から見ると、三巻本の日本古写經本はすべて初治本の規模を反映し、四巻本の刊本系統本はすべて再治本の規模を反映したと見られる。更に刊本と写本のテキストを比較した上で、初治本を本にし再治本を参照して編集された江南系統本の特殊性を論じた。江南系統本『仏道論衡』は他のテキストと比較し検討した結果、複雑な成り立ちを持つことが分かった。それは道宣自ら二種のテキストを流伝させたからである。本論第一・二・三章の考察を通して、種々のテキストの性質を定めることができた。それらのテキストの中でただ日本古写經本だけが唐において道宣が最初に完成した初治本に遡ることができ、長安写經を底本として成立した契丹蔵は、道宣によって後に完成させた四巻の再治本に遡ることができる。開宝蔵、高麗初雕・金蔵本は四巻再治本の変形で、高麗再雕蔵本は上掲二種の四巻本から生まれた四巻再構本である。更に江南系統本は三巻初治本と四巻再治本から生まれた四巻再構本である。

第四章ではまず『仏道論衡』の全 33 事の内容を概観して、記事が依拠する史料の本源により、前三巻を「集録」、第四巻を「実録」に再分類した。そして集録部分の三巻までの 26 条の記事は、引用した原資料により、本源の見当たらない⑭・⑮・⑲と、他の著者の著作を引用する①-⑨、⑬と、道宣自身の著作を引用することがある⑩-⑫、⑯-⑰、⑳-㉓の三種類に分けられる。更にその三種類を詳しく分析した上で、『仏道論衡』前三巻の編纂上の特徴を纏めた。

第五章では『仏道論衡』の「実録」部分（第四巻）の編纂上の特徴を考察した上で、内容の意義を検討した。まず、本書「実録」の記事の最後に附する護法僧の伝記を、『続高僧伝』・『宋高僧伝』の関係する所と比較した。そして高宗の宮廷論争での道教側の中心人物である李榮の論弁、及び彼の著作を中心として、この時代の護法僧の修学する背景をも考慮した上で、仏教の道教哲学の発展への影響を検討した。唐初の仏教義学が全体的に高度に発達している状況の下で、仏・道の両教の思想上の落差及び互いの交流により道教側も理論が発展していった。最後に唐初の「道先仏後」の宗教政策の下で、実際に仏教の理論や道教の哲学が急速に発展したことを背景に、高宗朝の宮廷論争が現れた原因と、宮廷論争における高宗の役割を論じた。更に「捨道帰仏文」を通して、高宗・武後の時代に、仏教の実際的な優勢及び道士の写經・造像の普遍性を検討した。

第六章では、『利涉論衡』や『道氤定三教論衡』などの唐代の仏道論争書及び元代の『至元弁偽録』により、『仏道論衡』の影響を検討し、更に時代によって修学の異なっている護法僧により、仏道論争の内容も異なっていることを示した。

論文審査の結果の要旨

王雪氏の博士学位請求論文『集古今仏道論衡』の研究』は、撰者道宣（596～667）が後漢の明帝から唐の高宗時代までに代々論争されてきた仏教と道教の代表的な論争をまとめた『集古今仏道論衡』を、文献学的・歴史的・思想的に研究した論文である。

先行研究には本書の文献学的研究は僅少であった。しかし近年劉林魁氏が高麗再雕版を底本として諸刊本大蔵経を校本に用い、さらに『広弘明集』や『法苑珠林』『続高僧伝』などを広く援用して『集古今仏道論衡校注』（2018）を上梓し、この方面の研究は格段に進展した。先行研究の歴史的研究や思想的研究などは中国仏教史上ながら議論されてきた礼拝問題に終始し、その基礎となる文献学的研究が看過されてきた問題を劉林魁氏はテキスト校注をもって確固たる地歩を築いたのである。しかし王雪氏が指摘するように全体解明に必須の日本古写経が用いられていない点は、劉林魁氏の研究はテキスト研究の端緒を開いた開拓者とし、次の真の先駆者を待たなければならなかった。

本論文の文献学的研究では、王雪氏はテキスト構成において刊本大蔵経系（四卷本）と日本古写経系（三卷本）とで大きく異なり、その全体的解明を詳しく研究している。日本古写経本の翻刻・校訂はもとより経録や諸目録を参照し検証している。日本古写経の古い記録では正倉院文書を取り上げ、伝来の考察を行っている。『開元録』などの経録では三卷本と四卷本とが併記されているが、王雪氏は三卷本を初治本とし、四卷本を再治本としたが、刊本大蔵経系の中でも江南系統本は複雑な構成になっていることを証し、その原因が道宣に帰するとしている。すなわち道宣自ら初治本と再治本を流伝させたことに起因するとしている。道宣の著述にはこのような展開を見せるテキストが多い。『集古今仏道論衡』もその例に漏れないことが判明したのである。

歴史学的研究では、先行研究が僧尼不拝君親の礼拝問題について集中しているので道宣自身の歴史観や歴史的背景の包括的研究が必要であると述べているが、本研究のなかでは高僧伝等の伝記を補完する慧立・義褒・静泰・靈弁を取り上げているに過ぎない。それらの考察はやや皮相的であり更なる考究が必須である。もっとも本書に関して礼拝問題以外の考察の必要性を論じた点は評価できるが、今後の研究の進展に期待するところである。

思想的研究では道教側の重玄学の泰斗李栄を取り上げている。敦煌文献の中から道士李栄が著した『洗浴経』（『太上靈宝洗浴身心経』）が見つかり、神塚淑子氏の研究を援用しながら二重否定を説く重玄学を重視する李栄の論述を紹介している。ただ、『集古今仏道論衡』では思想的展開は深く考究されず主に儒仏道の優劣、釈迦仏と老子は同年代か否か、仏教と道教の席順などが争われた。しかし王雪氏は、李栄の「本際」の義の論点や義褒の「道」と「自然」を取り上げ考察し、本書の道教側の論の衡りを述べていることは興味深く評価できる考察である。

次に評価の観点から本研究の特徴を挙げるならば、第一に日本古写経の諸本を丹念に調査・熟覧し、刊本大蔵経中心の校訂本作成の風潮に大きな反省点を投げかけたことである。

文献学的研究においては諸本の収集と校合が必須であるが、写本のなかでも当該文献の敦煌本が断簡程度しか存しない時だけでなく、敦煌本と親密性を有する日本古写経をあわせ校訂する必要性は言を俟たない。王雪氏は道宣撰『集古今仏道論衡』の日本古写経校訂本を示すことでその大いなる欠陥を補ったと言えよう。第二に、その研究成果に基づいて諸本の系譜を闡明にして「系統図」を示したことである。昨今テキストの系譜論的研究は盛んであるが、多くは詳細な本文校訂なしに一部を取り上げて作成する傾向が強い。徹底的な校訂本を作成することこそ文献学的研究の真骨頂である。

総じて王雪氏の研究は日本古写経の諸本をくまなく取り上げ考究することで刊本大蔵経系との差異を明確にしてテキスト本来の複雑な動きを明らかにしたことが評価できる。同論文はテキストの厳密な分析と多面的な解釈を通じて唐代の代表的な仏教史家であり南山律宗の祖であり、また『広弘明集』の編纂から『集古今仏道論衡』という仏教と道教の論争に関する論述・論争の書を撰述した巨大な学僧道宣の思索の経緯と深層を解明した点は、本学の評価基準に鑑みて高く評価でき、学術的価値を有するとともに、今後の関連する分野の研究に大いに寄与するものとして博士論文に該当すると判断する。